

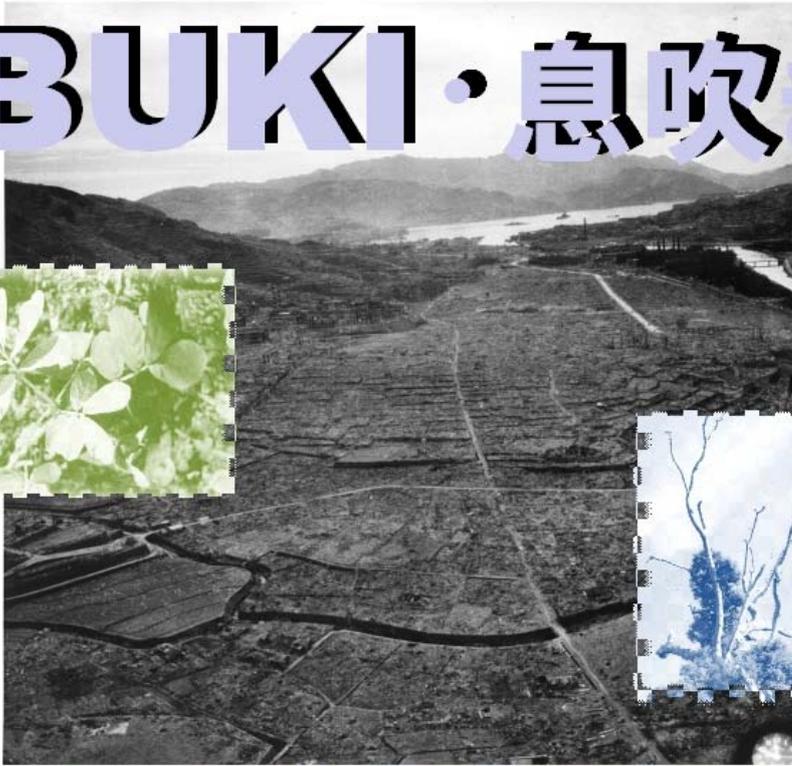
たくましい復興の姿 再現

Footprint
フットプリント

写真資料
調査部会発行
H23.10.17

2011年
第9号

IBUKI・息吹き



原子野からの復興 ここから私たちは立ちあがった

会場のポスターから

長崎原爆展リポート

六十六年目の「長崎原爆の日」が終わりました。こ
としは三月十一日、東日本
を襲った大震災、福島第一
原発での事故があり、私た
ちは今、多難な年に遭遇し
ています。連日報じられる
テレビニュースなど目にし

ことしもまた 各地で写真展

て、まるであの日、長崎市
民が体験した「原爆の惨
禍」を再び思い起こさせる
ものがあります。長崎平和
推進協会写真資料調査部会
は、毎年「長崎原爆写真展」
を開いています。ことしは
特に、あの悲劇のどん底か

ら懸命に復興に努力した市
民の姿を展示することで、東
日本の被災者を励まし、ま
た、市民には復興支援の輪を
少しでも広げてもらおうと
「復興」「生命力」をテーマ
に「IBUKI・息吹き」と題し
た開催になりました。

被爆した直後、被災地の原
子野には「七十年間は草木も
生えないだろう…」といわ
れ、失意のどん底に落ちまし
た。しかし、数カ月後には、
山王神社の大きなクスノキ
をはじめ、あちこちで植物が
芽を出し、生物の「生命力」
の強さを示すとともに、私た
ちに復興への後押しをして
くれたのです。

「原爆写真展」は七月～八
月にかけて、国立長崎原爆死
没者追悼平和祈念館をはじ
め長崎市立岩屋中学校、西彼
時津町役場、同長与町の長与
第二中学校でも開催、大きな
反響を呼びました。次ページ
からは、各地の展示会場から
のリポートです。

被爆地の片隅に姿現わしたカンナの花

追悼平和祈念館会場

追悼祈念館ラウンジで開催

する夏の原爆写真展も今年で三回目となりました。〇九年の「音の消えた街」では、原爆投下により物質的なものだけでなく日常まで奪われた悲慘さ、一〇年の「長崎原爆を撮ったカメラマン」では、使命感を持った五人のカメラマンの紹介と共に、撮影された写真にも彼らの命が込められている事を感じて欲しいと企画しました。



深堀部会長の説明を聞く見学者

一年の今年は「IBUKI・息吹き」と題して「復興」をテーマにしました。もちろんこれは、東日本大震災後の風景、原子力発電所による放射性物質拡散による被害で苦しむ姿が、被爆後の長崎と重なったからでした。テーマは、ある被爆者の体験記のタイトル『生命の息吹き』からもらいました。手記では次のように綴られています

昭和二十年九月末から三年間及び原子爆弾災害調査研究特別委員会による長崎の調査が行われました。その際、撮影された写真の中には、多くの植物が収められています。「被爆瓦の中に咲くアサガオ」「熱線と爆風で倒壊した工場の傍

出て来たように思えた。防空壕の共同生活者たちも奮い立ちました。』

「その時信じられないできごとを発見した。もう、九月だった。森田喜八（五六）は妻と嫁、孫を失い、一人ぼっちになつてしまった。…その頃のある日、彼が何気なく防空壕の入り口に立っていると、遠くに何か青いものが見えた。それは、何と大地から芽を出したばかりの「にんじん」の緑であった。身体中に何か生きる力が湧き

人間の力強さ 明るさ伝える

らに咲くカンナの花」「青空に向かつて伸びる若木」色のないモノクロ写真から鮮やかな色と生命力が溢れ出てくるようでした。彼らもまた、大地から芽生えた緑に救われた一人だったのかもしれない。

戦後、建物を始め生活などの復興の写真からは、人間の力強さ、明るさが伝わってきました。しかしその裏には『怒りも

見学者は途絶えることはなかった



悲しみも、恥ずかしさも嘆きもありませんでした。空腹感すら湧いて来ませんでした。人間としての総ての感情や感

福島からの 人も熱心に

写真展には、福島から長崎に転居したという方が来られていました。一心に見つめる写真の先に何を見ているのか彼がつぶやいた「大変です…」その言葉の中には、想像もできないほどの、意味が込められているようで、かけるべき

覚が、一切消えてしまったような気がしました。何から手をつけていいかわかりませんでした。完全な放心状態でした。自分を取り戻したのは、二、三年経ってからでした。その時、家族全員を失った、ぞーっとするような深い悲しみに初めて襲われました。原爆の悲慘さは時がたてばたつほど深まって行くものです。

（山田シズ 証言）このような消えない心の傷を負っている人がいたことを忘れてはいけません。人々が復興に向かう時、かならずしも前を見続けていたわけではないのです

言葉が見つかりませんでした。放射線による終わりのない不安と恐怖、このような思いは誰も決してあじわってはならないことです。これからも写真展では、時代の流れと真実を、人々の気持ちがあふれるように企画ができればと思っています。ぜひ、たくさんの人に見て頂きたいものです。（調 仁美）

岩屋中 中学校の「原爆写真展」軌道に 長与第二中

こぼれ話

でも九日の会場は、途切れるこ

写真資料調査部会が主催する恒例の中学校での「ナガサキ原爆写真展」は、今年も長崎市・岩屋中学校と長与第二中学校で開催した。中学校の写真展は今年三年目。受け入れる側の中学校の協力でやっと軌道に乗せることができてきたようだ。

最初は六月二十日から岩屋中学校、続いて七月十一日から長与第二中学校でそれぞれ一週間開いた。主な展示写真は長崎に投下されたフアットマン、きのこ雲、原爆前後の

関心寄せる原爆報道

最初は六月二十日から岩屋中学校、続いて七月十一日から長与第二中学校でそれぞれ一週間開いた。主な展示写真は長崎に投下されたフアットマン、きのこ雲、原爆前後の

長崎市街空撮、爆心地の惨状、山王神社の被爆クスノキなど代表的なモノと其々の中学校に関連した原爆写真である。会場は生徒が見易いように職員室前廊下、階段、玄関ロビーを使用してもらった。岩屋中はあの日、たくさんの

負傷者たちが助けを求めて来た「滑石救護所・岩屋クラブ」のすぐ目の前の学校。長与第二中は、昨年一月、県美術館で開催の、子供たちが描いた

八月一日から九日まで九日間開催した追悼平和祈念館での「長崎原爆写真展」。写真資料部会員は、この週が一年の内一番忙しいときである。

ひよこり野党 大物代議士訪問

部会員たちは、連日会場で展示写真の説明にあたったが、八日・九日はそれぞれ忙がしく、さすがにやり繰りがつかなかった。このため、私と深堀部会長は「来年からは八日までとし、九日は止めようか」との話まで飛び出した。

展示会最終日、同校の小嶺

(堀田 武弘)

NBCテレビが 全国ニュースで

特に長与第二中の模様は、NBCテレビが「報道センターNBC」で放送したため、保護者も見学に訪れたそうだが、このニュースは、八月八日夜の「ニュース23」でも全国放送された。

秀太君が代表して「原爆が大変怖いことを知った。写真展で見たことをいろいろの人に話し伝えていきます」と力強く語ってくれた。

校内写真展の開催を通じて自分たちの住む地域も原爆の影響を受け、多くの被爆者が苦しんできたことを、初めて

(堀田 武弘)



きのこ雲や爆心地付近の写真に見入る生徒たち



平和教育に熱心な生徒達は、自分たちで飾り付けをした。いずれも長与第二中学校

福島原発事故で関心高まる

時津町役場会場

被爆の実相を伝えようと、各地で開いている「ナガサキ原爆写真展」は、今年も七月二十六日～二十八日まで三日間、西彼時津町役場で催し、

たくさんの人が、六十六年前の惨状のようを見た。この写真展は、平成二十年から長崎平和推進協会の写真資料調査部会が主催し、時津町が協力する、という形で毎年開催しているもので、今年で四年連続。

会場で拾った話

赤ちゃんを抱いて訪れた若い夫婦

私たちは、戦争を知らない時代に育って幸せに思う。たった一個の爆弾が、人も家も吹き飛ばし、焼き尽くすなんて信じられない。このような悲劇が、二度と起きて欲しくないですね。

(ファットマンの写真の前)

放射線の恐怖ひしひし

会場の役場ロビーには、荒廃した焼け野原が広がる、松山町の爆心地付近の写真をはじめ、全壊してしまった県庁や城山国民学校、救護所との関心は強く、また当時をよ

なつた新興善国民学校。そこで治療を受けている人たちの様子など、約七十点を展示した。特に時津町(旧時津村)は、長崎市と隣接するところだから、たくさんの被爆した

会場で拾った話

当時活水女学校の四年生

学徒報国隊で三菱兵器大橋工場から逃げる途中、大橋を通った時、焼けた残骸の電車のそばの架線鉄柱では、柱の下に真っ黒な若い女性の焼死体があり、思わず念仏を唱え合

(電車の被災写真を見て)

会場で拾った話

当時十歳の少女―道ノ尾駅

付近を歩いていて爆風で吹き飛ばされ、しばらくは起き上が

(道ノ尾駅付近の民家の惨状を見て)

当時三菱製鋼所勤務の二十歳の男性

昭和二十年六月陸軍に志願、鹿児島で終戦。「道ノ尾駅」の写真をみると、複雑な思

(道ノ尾駅舎の写真を見て)

なかなか遠くまで被害を及ぼしていることを実感していた。

ツイッター

長崎平和推進協会・写真資料調査部会―というちよつと長めの名前の部会が、長崎原爆資料館の地下一階の奥まった部屋で活動している。部会員わずか七人の小さな部会だが、この部屋が急に脚光を浴びる時期がある。新聞、テレビ、ラジオなどのメディアは、毎年、原爆の日が近くなると特集をはじめ、特ダネを狙った報道合戦を繰り広げる。

特に八月が近づくにつれ、記者の訪問はひんばんになり、原爆担当の「記者クラブ」が、ここに特設されたかのような、ごった返しを見せることもある。部屋の部会員は、いずれも原爆に関しての知識豊富なベテランぞろい。それぞれ記者相手に大忙しとなる。その中で一番忙しいのが深堀部会長。各社の記者たちは、行列とまではいかないが、順番待ち。「人気者はない」と思いながらも記者たちの熱心な質問に、ていねいに答えている。